

日本キリスト教保育所同盟 (題字 前理事長・木村 量好)

THE ASSOCIATION OF CHRISTIAN NURSERIES IN JAPAN

事務局 つくし保育園内 〒601-1336 京都市伏見区醍醐柏森町25

発行責任者 理事長 小南 進

『帰るべき在処としてのクリスマス』

新澤 誠 治

『イエスは再び言われた。「わたしは世の光である。私に従う者は暗闇の中を歩かず、命の光を持つ。』

新約聖書 ヨハネによる福音書 8章12節

12月24日のクリスマス・イブは、私が福祉の世界に入る決意をした日であり、自分の人生の原点になった日です。

私の家は製菓業を営み、長男としてそれを引き継ぐべく、昼間は小売店や工場を手伝い、大学(商科)の夜間に通い、その合間に東京の周辺と言われる、高橋ドヤ街の子どもたちを週に一度、東京YMCAのボランティアグループの一員として学習会をしていました。

1957年のクリスマスの夜、そのグループの人たちと共に、深川伝道所で礼拝をした後、蝋燭の火を掲げ、「もろびとこぞりてうたいまつれ」の讃美歌を歌いながら、暗闇の街に出て、キャロリングをしました。

赤提灯が下がる屋台で酒を飲む労働者の脇を通り、トタン板と筵に囲まれた子どもたちの家庭を一軒一軒と回り、戸口に下がる筵をくぐり、「クリスマスおめでとう」と言って、子どもたちにプレゼントを手渡していました。

10軒の家を回った最後に、焼けビルの2階に寝起きしていた、和子ちゃんとおばあちゃんの住み家を訪ねました。木片が貼られた窓から風が吹き込み、揺れる60ワットの裸電球の下に、ポツンと置かれたベッドに二人は抱き合うように寝ていました。私たちはその光景に声を失い、そっとプレゼントを置いて、崩れ落ちそうなビルの前で、風に消え入りそうな蝋燭の光をかばいながら、「きよしこの夜」を歌いました。歌いながら、私は子どもたちの現実の貧しい生活を目の当たりに見て、馬の匂い、わらに囲まれた馬小屋で生まれた幼子イエスを思い、同時に自分たちが安穏とした暮らしの中において、時々ボランティアとして通っていることが、ひどく偽善的行為に見えてきました。

天井から光が差し込んでくるのを感じて、神さまの「この地にお前も住み、子どもたちに寄り添って生きよ」と声が心の中に響き、「自分はこの子どもたちの近くにいて“共に生活し、子どもを支える仕事をしよう”」と福祉の世界に生きる決心をしました。両親を説得するのは大変でしたが、期待を振り切る形で家を飛び出し、伝道所と保育所の用務員として、園庭にあった小さな小屋に住みこんで働くことにしました。

決心をした翌年の7月に住み込みましたが、その日に伝道所の牧師から受洗して、一信徒として歩んできました。それから60年たちましたが、その間両親は他界、その後に私たち家族は両親の家に住むようになり、近くの教会に移籍しました。ただ日々、仕事に追われ、また病気で入院を繰り返し、教会を休むことが多く、決して忠実な教会員ではなく、その結果自分を失うこともありました。

現在3人の息子と娘は成長し、保育園や子育て支援センターの園長、一人はシンガーソングライターとして、子どもたちの歌を作り歌っています。それぞれに私たち夫婦から旅立った感じで独立し、それぞれの家族が揃う機会はありません。しかし24日のクリスマス礼拝には孫の3人を含めて、新澤一族は必ず揃って参加して、並んで聖書を読み、讃美をしています。これはそれぞれの家族が独立した今まで、何十年と続いています。

このようにわたしの最初のクリスマス体験は深く心に刻印され、自分たちの日々の生活や生き方を問い直す、「変えるべき在処に戻る日」になっています。私たち夫婦だけでなく、子どもたちの家族が揃い、私たち一家の存在の原点を省み、それぞれの生き方、家族の在り方を問い直す日となっています。

『4本のろうそく』

佐原良子



保育園の朝の礼拝の中で子どもたちは、園長先生からクランツに飾られた4本のろうそくの話を知りました。園長先生は4本の明かりが灯されたろうそくを指さしながら話をされました。

「1本目のろうそくは【平和】を表しています。このろうそくは言っています。『私はこの世の中は、怒ることと戦いで満ちているので燃え尽きてしまいそうです。』と悲しい顔をされました。

「2本目のろうそくは【愛】を表しています。このろうそくは言っています。『ひとびとは愛することの大切さをわかってくれないで、愛することをしようとしないので、もうこれ以上輝くことはできません。』と寂しそうに言いました。

「3本目のろうそくは【喜び】を表しています。このろうそくは、『人々は喜びが、神さまを信じる心と愛からきていることを知ろうとしません。だから私も燃え尽きてしまいそうです。』とやっぱり悲しそうに言いました。

その時、薄暗いろうそくの光を見つめていた一人の赤ちゃんが語り始めました。

『心配しなくていいよ、私は4本目の【希望】のろうそくです。私が輝いている限り、ろうそくは決して消えることはありません。』と。

園長先生の悲しんでいた顔は、ホッとした顔に変わっています。実はその赤ちゃんこそ神さまがくださったイエスさまでした。園長先生は保育園のみんなもろうそくに明るい光を灯せること、この世界を希望に変えることができることを話して下さいました。

この話を聞いた子どもたちは集まってきて相談を始めました。「どうしよう、イエスさまの誕生をお祝いするクリスマスに、輝くろうそくの光が小さくなったら大変!」「心が温かくなるクリスマスにならないよ!」と。



すると、子どもたちがろうそくの話をしてしていると聞いて、園長先生もやってきてお話の輪に入して下さいました。

子どもたちは、「自分たちもろうそくの光を明るく灯すことができる」と言われた言葉を考えました。私たちもろうそくの光を輝かす子どもになりたいと考えたからです。

まず始めに【平和】のろうそくについて考えました。

平和のろうそくを自分たちが灯すには、みんなが仲よくすることだと気づきました。



次に【愛】のろうそくについて考えました。自分たちが愛のろうそくを燈すということは、みんなが自分の好き勝手を言わないで、優しい気持ちでみんなと遊ぶことだと考えました。

次は【喜び】のろうそくです。朝の礼拝で、ろうそくは言っていました。「みんなは、喜びが神さまを信じる心と愛から来ていることを知らない」と。

子どもたちは神さまの心や愛が分かるように、礼拝の話をしっかり聞くことに気づきました。



今度は【希望】のろうそくについて考

えました。すると園長先生が話して下さいました。「神さまとイエスさまはみんなのことが大好きだよ。一生懸命みんなのことを愛して下さいているんだよ。先生の事もね。だから先生も『神さま、ありがとう』っていつも思っているんだよ。そしてその愛して下さいている喜びと一緒に『神さまとイエスさまが愛して下さいているから安心だよ』『守って下さっているから大丈夫だよ』とみんなに伝えたいんだよ。」



ろうそくが消えないか心配していた子どもたちの顔が少しずつ希望のある安心顔になってきました。そしてみんなで明かりを燈す気持ちになったら元気が出てきました。

それから子どもたちはイエスさまと神さまの事をもっと知りたいと、礼拝の話を静かに聞くようになりました。

子どもたちは、イエスさまのように、心の中に人を愛する気持ち・人を大切にする気持ちがどんどん膨らんでくるといいなと思いました。

怒りたいことも少しは我慢できるようになったよ。ケンカをしたい時も、手を上げないで、赤ちゃんイエスさまを思い出すと我慢できるようになった友だちもいるよ！

礼拝のおはなしをよくきいてお祈りします



てなよくなる



4本のろうそくもだんだんと元気を取り戻して、明るくなっているように感じます。

うれしいな、イエスさまの誕生はみんなを思って下さる神さまからの愛のプレゼント。

保育園のみんなからも愛のプレゼント、イエスさまのお手伝いをしてみんなの心に明るい光を届けます。

“アドベントキャンドルもいつまでも輝き続きますように”

「子どもが戻らねば、復興はない」

会津放射能情報センター 代表 片岡輝美

東京電力福島第一原子力発電所事故により、原発立地地域の住民は避難を余儀なくされました。当然、学校も閉鎖されました。避難した生徒らの行き先が分からず、教員たちは苦労して探したと聞きました。大きな混乱の時期を過ごしたのち、県内の廃校の利用や間借りするなど、学校再開にこぎつけました。ひとつの学校が数カ所に分かれ、生徒も離ればなれになりましたが、教員も移動しながらの掛け持ちの授業が行われました。心身に大きな疲れを覚えたことでしょう。3年を経た今、双葉郡と南相馬市、飯館村の高校計8校は、他の市町村の仮の校舎で学ぶ「サテライト校」方式を導入しています。双葉郡の県立高5校の在籍者数は震災前の2010年5月は約1500人、震災後2013年11月時点で391人と震災前の3割以下に落ち込んでいます。

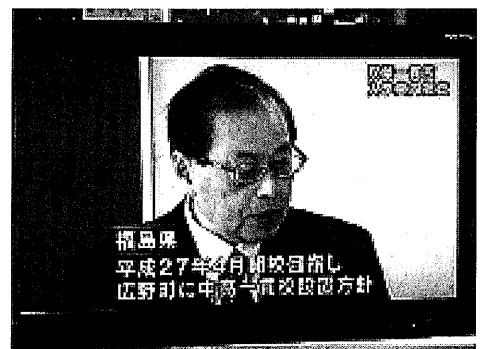
今、福島県では「帰還」が大きな復興への流れに組まれています。しかし、除染しても大幅に低くはならない空間線量の地域に子どもを戻すことはできないとの判断やインフラが整備されていないなどの理由で、県が望むような帰還が進んではいない状況です。

2013年5月13日朝日新聞に掲載された記事の見出しです。



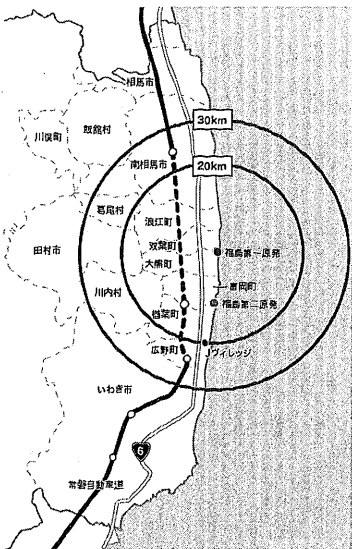
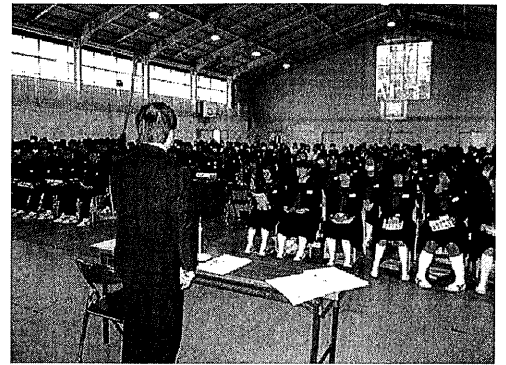
「子どもが戻らねば地域は消滅」「中高一貫校を福島・双葉郡に新設」「2年後目標に子どもの帰還を促す」「自治体・焦り」「親・よほどひかれたい」として、記事にはこのように書いてあります。「双葉郡内に高校は5校あるが、いずれも郡内での早期再開のめどは立っておらず、避難先に設けられている仮校舎の生徒数も少ない。そこで、郡内に大学進学などを意識した中高一貫校を新設し生徒を集める。仮校舎は移行期間を経て休校にする案が挙がっている。」

「大熊町の教育長は『開校時期が遅れるほど避難先の生活が安定し、戻りづらくなる。郡全体で思い切った取り組みをしないと子どもは戻らず地域が消滅する。この2、3年が勝負だ』と危機感を募らせる。通常は4、5年かかるといわれる新設校の開校を2年後に目指すのも、そんな焦りからだ。」私は、この記事を見て「まさか、そんなこと、ホントにやるの?」と叫んでしまいました。地域存続のために子どもを集めるなんて…。



しかし、この構想は着実に進んでいました。今年年明けの2月5日、福島県は予算3億円を立て2015年春開校を目指すことを発表。それ以前に県内3万7千人の中学1、2年生に意向調査を行っていま

した。745人（内113人は双葉郡出身者）の進学希望を受け、一定のニーズがあると判断し、着工したのです。この高校は「ふたば未来学園高等学校」と命名され、大学進学・スポーツ選手育成コースの他、工業商業、農業の職業人の即戦力を育てる実業系コースが設置されます。「ふたばの教育復興応援団」も結成されました。福島県出身の西田敏行さんや箭内道彦さん、著名人の秋元康さんや林修さんやオリンピック選手ら16名が来校



し、高校生達に直接講義を行います。この応援団の共通の思いは「前例なき環境には前例なき教育を」。開校されるのは原発から30 km圏内の広野町です。

原発事故の向こうに見えることのひとつは、県民の復興や再建の目指す方向が一致しないことです。ふたば未来学園高等学校のような復興のあり方もあれば、子どもを利用する復興は正しいのだろうか大きな疑問を持つ私もいます。「前例なき環境」は大人が作った環境です。それは原発事故という長期に渡る世界的規模の環境破壊です。今でもコントロール不能の危機的状況が続いています。健康被害も広がっていくでしょう。そのような環境に「前例なき教育」を目指す先に見えるのは「原発事故の過小評価・安心安全な福島県・国内の原発再稼働、そして海外輸出」の日本政府や電力会社の目論みです。私には、真摯に子どもの生命を守り育みたいと願う責任ある大人の姿は見えてきません。

今年もクリスマスが訪れます。2011年のクリスマス、どの子の生命も守られるようにと祈ったことを思い出します。そして、4回目のクリスマス。正直に言えば、どの子の生命も守られないことを知らされています。放射能のことを心配しない親にしてみれば、私たちの活動は理解できません。そのような人々との接点は持てません。今年8月末、会津若松市で5名に小児甲状腺ガンが見つかったとの衝撃的な報告を受けました。その家族はどのような思いで検査結果を聞いたのだろうか、これからの不安に耳を傾ける支援者はいるのだろうかなど、いろいろ想像しながらも、地域行政に危機意識を持って欲しいと十分な働きかけができなかった自分自身の限界も感じています。日本が、戦争ができる国になるために大きく舵を切った1年でした。集团的自衛権行使容認・秘密保護法施行反対する国民の大きな声も無視し続ける日本政府です。

今年もクリスマスは訪れます。月日が巡れば当然かもしれません。でも、暗闇に佇んでいた羊飼いや夜道を進んでいた博士らにとって、輝く光は「何かが起きている」との期待や希望として見たことでしょうか。それは、今も尚、私たちに繰り返し語られる「私はあなたとともにいる」と主が約束した光です。だから、クリスマスは嬉しいのです。

クリスマスおめでとうございます。

事務局だより

クリスマス献金のお願い バングラデシュの保育を支える

「ホームステイ体験」

子どもたちとは言葉は通じないけれど日本から持ってきたシャボン玉や紙風船、折り紙、クレヨンを使ってたくさん遊びました。4歳の男の子は私のことを気に入ってくれたようで、「お客さんが先に食事をして、家族は後で食べる」というバングラデシュ流のおもてなしの時もずっとそばでニコニコ。彼が寝る時間まで一緒にいてくれました。おかげで寂しい気持ちは消え、暖かい気持ちになりました。

一夜明け、朝になるとやっと家の敷地がどのようなになっているかわかりました。同じ敷地には数件の家と、鳥小屋、台所、トイレ、井戸があります。みんな親戚で暮らしているようです。水回りは井戸しかなく、おそらくお風呂も料理も歯磨きも、みんなその井戸を利用しているようで、トイレで使う水は朝一番にお母さんがバケツにくんでいました。

私が家の周りをうろうろしていると近所の子どもたちがやってきました。みんな木の陰から見ていたり、かくれていたりするのです。恥ずかしいのかな？私のほうから近づき、キャンディーと折り紙で作った紙風船をプレゼントするとみんなニコリ！子どもたちのこういう姿は万国共通だと感じました。



(2014年度参加者 矢口 文代さん バングラデシュ訪問記録より抜粋)

もうすぐクリスマスです。バングラデシュの子ども達、母親たちの子育てを応援してあげてください。献金をよろしくお願いたします。

「クリスマス献金のお願い」

- ・ バングラデシュのNGOであるCHCPを通じて、現地のこどもたちが雨天でも安心して保育が受けられる「保育小屋」(一棟10万円)を寄贈するために
- ・ プレリーダーを養成するための研修のために
- ・ 「災害支援金基金」のために
- ・ 同盟強化のために